

## ◆特集 日本労働運動の劣化をいとめる

# 今は、職場に労働組合が見えない

私鉄京成 組合員 熊谷 弘一

### 労働組合の主人公は組合員

私は1991年に入社し、今年で勤続34年の52歳になります。私が入社する前の70〜80年代は私鉄春闘をストライキでたたかい「関東の三バカ」と言われたそうですが、私は入社翌年の92春闘で、始発から昼までの半日ストの経験しかありません。34年間の職場と労働組合の変化と現状について報告をしたいと思います。

23春闘から25春闘の3年間は満額獲得がされ、結果だけを考えれば本給が6万円弱賃上げされ、多くの組合員が素直に喜んでいきます。しかし、私も職場組合員も「闘い、勝ち取った」という実感はほとんどありません。

### 一人一行動の春闘

入社して10年ほどは、「一人一行動」などのスローガ

ンの下で、私鉄総連総決起集会や私鉄バスうたごえ集会、単組のうたごえや決起集会は勿論ですが、分会教宣部を中心に春闘標語の募集や駅頭横断幕の取り組みなど、組合員が参加した行動が求められ、自分たちの賃上げなどの教育がされていました。

労働協約改定闘争と職場総点検闘争の闘いが、隔年で「秋闘」として、年間を通したサイクル運動で、組合員に提起がされ取り組まれてきました。

### 組合員不在の闘いに不安

特に最近の春闘は、組合員不在で組合役員だけの闘いになっていくようで、満額を獲得しても直ぐに会社が賃上げ分を取り返すように思えて、不安を感じています。春闘と秋闘に対して、職場組合員の問題意識が薄れ、組合役員だけの取り組みになることは、労働組合の自殺行



合理化が提案され、一人勤務駅が拡大してきましたが、合理化絶対反対の闘いとはならず、条件闘争だけの話し合い決着に終わり、会社の思う壺で進んでいます。当たり前ですが、会社は徹底して総額人件費を抑えるために、様々な手口を駆使して合理化を進めてきます。

## 不安の声が多く出されている

今年の4月1日には、グループの鉄道会社を吸収合併しました。同じ鉄道会社として、今後の勤務形態や賃

為であり、労働組合の弱体化を深化させることとなります。今、多くの組合員が職場に労働組合が見えないと言います。私が私に言わせれば「匂いも感じられない」と言いたいです。例えば、駅職場の「一人勤務化」という、出面定数の削減

金体系等々、職場では不安の声が多く出されています。4月1日付の会社から出された「社報」では、社員就業規則等の一部改訂で、いきなり退職金が半分以上になるとも読み取れる内容で驚きました。ようよく読んで理解すると、吸収された側の社員は、旧会社を一旦退社扱いで退職金を精算し、新会社で勤続加算されずに退職金の支給月数が私たちの半分になります。このようなことは、当然ですがすぐに全体化される危険は十分にありますが、今後は勤務形態などの変化も予想されますが、いきなり何が飛び出すか不安でいっぱいです。

## 愚痴の出し合い大切に

労働組合の強化には、徹底して組合員参加の春闘や秋闘に変えていく必要があります。自分の生活費であり、自身の健康などの意識を一人ひとりに持たせることが大切です。

私もその立場で、職場で「愚痴」の出し合いを意識的に取り組んでいます。愚痴とは、不平や不満の固まりであり、次にその不平・不満をどう解決するかの要求へ繋がられると思います。

(くまがい こういち)